

〈解題〉

山本 千晶

エヴァ・キテイは、現在ニューヨーク州立大学ストーニー・ブルック校哲学科教授であり、専門は主に西洋哲学、フェミニズム理論である。また、認知障害あるいは知的障害の研究をとおして伝統的な西洋哲学とそこで描かれる人間像を批判的に分析する哲学者でもある。以下に収録するのは、昨年秋にお茶の水女子大学で開催されたキテイ講演会「ケアの倫理からグローバルな正義論へ」¹の記録である。

障害（依存）の問題とフェミニズムが“交差”する領域は、「依存労働者」に目を向けることではっきりと浮かび上がってくるだろう。これは、主著『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』²の主要なテーマの一つであり、重度の知的障害をもつ娘との関わりとそこでの哲学的思考が、フェミニズム理論をさらなる深化と発展に開く契機となることが理解される。本書は“依存”に着目することで、伝統的政治理論の前提である自律神話を批判するという体裁をとるが、そこには、フェミニズム理論にとって主要ないくつかの論点が意図されている。

一つは、ケアの倫理と正義の倫理の関係の定式化という理論的側面に関わる問題である。一方は具体性に、他方は抽象性にそれぞれ重点をおくことで、ケアの倫理は正義の倫理に対する批判的視点という使命を与えられる傾向がある。キテイは、ギリガン以降のケアの倫理の議論を踏襲しつつ、依存の問題に関連させながらそれを再解釈することで、両者の接合を試みる。この具体的局面の一つが「平等」概念のキテイによる再定義に現れていることは、本書あるいは本講演内容を一読すれば明らかであろう。

二つ目は、一つ目の問題と関連して、ケアの倫理に代表されるような具体的で特別な関係性から、何か規範的基盤を導けるのか、という問題である。つまり、批判的な足場という以上の、オルタナティブな理論としてのある程度の一般化可能性の問題である。キテイは、依存者と依存労働者の関係性の中に人間存在の特性となる要素を見出し、それに基づき正義の原理を考察することで、この問いに答えようとする。これは同時に、ケアをめぐる理論と実践の接合としても解釈しうる重要な試みでもあるだろう。

以上、フェミニズム理論にとって依存の問題からアプローチすることの意義を述べたが、本書の出版以降、依存の問題はフェミニズムの議論にますます重要な課題を突きつけている。移民や外国人労働者といった依存労働者のグローバル規模での展開は、男女間という以上に女性間の格差の広がりや、より具体的ではっきりとした形で提示している。とくに80年代以降、「女性」というカテゴリーをめぐって激しく展開されてきたフェミニストたちの論争は、この問題にどのような光となりうるだろうか。本講演での注目すべき点の一つにも、『愛の労働』で提示された正義論がこの問題に対してどう応答しうるか、という問題があった。キテイは、ここでも徹底的に依存者—依存労働者関係を軸に問題を分析している。そうすることで、『愛の労働』においてもすでに指摘されていた依存の「入れ子状」の構造が、波のように広がりながら国家間を超えていくイメージ、そしてそこから浮かび上がる国家間の経済格差という問題を提示する。この問題が、彼女にとってもまだ考察が始まったばかりであるという感があり、必ずしも十分な時間を割いての議論ではなかったが、しかし、この複雑で困難な課題と取り組むための一つの指針ははっきりと示されたという点で、今後のフェミニズムの議論にとっても示唆的である。

(やまもと・ちあき／目白大学短期大学部非常勤講師)

注

- 1 この講演会は、ジェンダー法学会、お茶の水女子大学ジェンダー研究センター、東北大学GCOE「グローバル化時代の男女共同参画と多文化共生」拠点共催により、2010年11月13日に開催された。なお講演内容と議論の詳細は、2011年5月白澤社よりエヴァ・F・キティ、岡野八代、牟田和恵著『ケアの倫理からグローバルな正義論へ』（仮題）として邦訳刊行される予定である。
- 2 エヴァ・フェダー・キティ『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』（岡野八代・牟田和恵監訳）白澤社、2010年。（Kittay, Eva Feder. *Love's Labor: Essays on Women, Equality, and Dependency*, New York: Routledge, 1999）